ご挨拶

この度はけの森美術館では、「海と画家との説話性―海をめぐる中村研一の物語―」と題した所蔵作品展を開催いたします。

洋画家・中村研一（1895-1967）の幼少期には、常に魅力ある風景として海が身近にありました。出生した宗像市、鉱山技師である父の赴任で過ごした新居浜市は、どちらも玄海灘・瀬戸内海という穏やかな内海に接し、明治以降、造船業などが発展した地域です。これが強い印象を残したのでしょうか、海景の中でも特に中村を惹きつけたのは、船のような人工の構造物との対比でした。

中村研一の実弟で同じく洋画家となった中村琢二は、兄が木っ端などをうまく使って作る船の模型はとても出来が良く魅力的で、こども心にうらやましかったと語っています。こうした幼少期の船に対する関心は、長じて画家になってからも続き、海景を主題とする作品にはしばしば重要なモティーフとして艦船が登場します。

本展では中村研一の生涯にわたって続く海とのかかわりを「はじまりの海」「展望の海」「追憶の海」の三章、さらに二階展示室のテーマ展示「海を渡って見てきたこと」から探っていきます。船と海を描いた作品だけでなく、遠い海へ思いを馳せるようなものや、中には一見すると海と関係があるとはわからないような、意外な作品もあるかもしれません。画家の発想が自由に広がっていくさまに、ぜひあなただけの海との物語を見つけ出してください。

小金井市立はけの森美術館

第一章　はじまりの海

中村研一の少年時代をうかがう上で、意外と参考になるのが実弟・中村琢二の「日記」※である。「小学校第三学の時、最も思出多きころ」との、12 歳頃の日記には、２歳上の「兄さん」がたびたび登場する。

この頃兄弟は新居浜の父母の元を離れ、宗像の祖母宅で暮らしていた（祖母宅は現在「中村研一・琢二生家美術館」として公開されている）。そこまで海が間近という訳ではないが、休日に鐘崎の浜に行き泳いだり、「みる」（ミル貝）をとったりしている。

また弟の日記の記載で興味深いのが、工作が得意な兄さんが「舟」を作ったという記述である。琢二はこれを 3 日後にもらっている。ところがさらに 5 日後、「兄さんにもどす」とあるのだ。理由が書かれていないが、後年の言及から理由が想像できる。兄弟げんかをすると、兄は、一度は自分に対して認めた手製の船の権利を取り消した ― よくある兄弟のやり合いだが、この時もおそらくけんかをして、兄が弟から没収したのだろう。

兄弟はたまにけんかもするが、仲は良かった。この年 4 月「兄さん修猷館の入学しけんに合格す」と、兄が進学で福岡に行ってしまうと、弟はしきりに「さむし」（さみし）と日記に書くようになる。そして、夏休みに一緒に新居浜へ帰省をするのを心待ちにした。新居浜

では、連日海で泳いだり、船に乗って四阪島や高松港に出かけたりと満喫している。
　宗像と新居浜それぞれが兄弟にとって「思出多きころ」を象徴する地であり、そのどちらにも海の気配があった。
※「宗像市史史料編 別巻 中村研一/琢二画家日記」宗像市史編纂委員会 編、宗像市 1995.1

第二章　展望の海

　中村研一がフランスに渡ったのは 1923 年の事だった。大阪商船の倫敦丸に乗って、マルセイユへ船旅をしている。明るい外洋の船旅に、中村の期待も高まっただろう（実はこの船上で倫敦丸機関長を描いた貴重な肖像画が昨年度当館に寄贈されたが、早急に修復の必要があり、出展が叶わなかった。修復後ぜひともお目にかけたい）。
　渡仏以降、中村は何度か印象的な海の旅を経験した。本展出展作に関わるものを時系列に並べると 1930 年につごう 6 年に及ぶ滞仏生活を終えて帰国してから、ジョージ 6 世戴冠記念観艦式に参加する「足柄」への乗船（1937）、広東攻略作戦取材（1938）、南方従軍派遣（1942）で、それぞれの場所の海と対比される艦船の様子が印象的である。重厚な人工構造物が"浮かんでいる“ことは、長じてなお中村の興味を強く引き付けた。
　さらに「海と船」が次第に戦争を示すイメージとして位置付けられていく過程に注目すべきだろう。《海の見える庭》の、中央に浮かぶ細長い構造体はクレーンが突き出しているシルエットから浮ドックだと思われる。浮きドックは「船のようなもの」だが、厳密には船を格納するものである。日本軍が英軍を降伏させ占領したシンガポールには、イギリスの巨大な浮ドックがあった。これはシンガポール陥落を象徴するものの一つとして誇らしげに喧伝された。
　手前の鉄柵がひしゃげ一部を残す様子から、「庭」と呼ぶ場所では、激しい戦闘からさほど時間が経っていないことが分かる。浮かぶ黒いシルエットはシンガポール陥落を象徴する巨大浮ドック ― これは奇しくも「キング・ジョージ 6 世」の名を冠していた ― なのだろうか。シンガポール陥落を直接的に描くことも、題名に関することも避けながら、かえって《海の見える庭》は戦争の気配を強く感じさせる。

第三章　追憶の海

　終戦の 1945 年 12 月、中村研一は小金井に転居した。当初は、もともと建っていた屋敷に入居した。しかし農家のつくりだったために、採光に不便を感じ、独立したアトリエ、そして母屋と茶室を建てると、中村は晩年まで制作に打ち込んだ。そうすると自然と“はけ”の風景が描かれるようになり、《木蔭》は富子夫人によれば、中村が母屋の暖炉上に飾っていた作品である。
　　緑と湧水豊かな環境は気に入っていただろう。しかし武蔵野の“はけ”の森では、少年期のように日々の暮らしの中で海の気配を感じることは難しい。外出しなかった訳ではないし、画壇の重鎮として中村はさまざまな所に顔を出す必要があったが、かつてのように海を

渡る長い旅はもう無かった。船を描くことも、戦中に制作した戦争に関わる作品を意識してか戦後は素描やイラスト程度に留まる。

そんな中村が 1950 年に描いた《夏》は、妻をモデルに、椅子にゆったりと座る姿を描いている。しゃれた装いの妻・富子は結婚以降中村がたびたび描いてきたものだが（例えば《北京官話》ではチャイナドレスを着ている）、《夏》ではカラフルな水着を選択している。肩から胸前に通した赤黄の紐と濃紺の地、窓の外には夏の“はけ”の緑。色彩のコントラストに目を奪われる一方で、外の様子は改めてアトリエが海から遠く離れていること、そこであえて水着を着用する意味に注意を向けさせる。もう「ここ」にはない海に、中村研一は何を思っていたのだろうか。

テーマ展示　海を渡って見てきたこと

1 階展示室の「展望の海」で言及したように、中村は生涯のうちに何度か海を渡る経験をしている。こちらのテーマ展示では海を渡って見てきたことが作品にどのように反映されているのか、フランス滞在を中心に見てみたい。

1923 年にフランスに渡り、1926 年の一時帰国を挟んで計 6 年に及んだフランス滞在中、中村研一に特に影響を与えた画家としてモーリス・アスラン（1882-1947）がいる。中村はアスランと親しく交流し、描法や歴史などの教授を受けた。郊外風景や女性像は、アスランの影響が与えた変化を見る上でわかりやすい。黒を使って輪郭をはっきりと描く表現は「フォルム」を重んじる以降の中村の姿勢を決定づけるものである。

また、西洋絵画のアトリビュート――宗教的な意味合いを示すための表現形式の約束ごと――に関する知識を得たのも、フランス滞在経験が寄与する所が大きかったように思われる。面白いのはそうした知識が帰国してすぐよりも、間をおいて作陶という画家としての本分とは少し違う所で積極的に活用されていることである。瀬戸焼の飾皿はそれぞれ鮮やかな色絵で絵画的な表現がしてあるが、人（天使）、翼のついた牡牛、ライオン、鷲は、新約聖書の正典各書を記し福音書記者として列聖された聖マタイ（人）、聖ルカ（牡牛）、聖マルコ（ライオン）、聖ヨハネ（鷲）のアトリビュートである。牡牛の背後に十字の表現があることを考えても、中村はそのことを明確に意識していると見ていいだろう。